

沖縄協会だより



平和の絵-「戦争と平和」

20点連作-第4作

西村計雄 作

摩文仁の丘

300号

176.3×305.7×6.6 cm

沖縄
平和祈念堂
所蔵絵画紹介

〈制作意図〉 日米両軍将兵と一般市民まで巻き込んで20数万人にのぼる尊い命を奪った沖縄戦。その終焉の地である“摩文仁の丘”を悲しみの涙で表現した。そそり立つ摩文仁の断崖から身を投げ自らの命を絶った人々を赤い点線で表し、右端には涙を吸って育つといわれている火焰木を配した。その木に忌み嫌われている鳥を二羽描いた。その1羽は戦争を嘲笑うように東から西へ(沖縄では不吉を意味する)向かって飛び立つ。西に傾きかけた紫の太陽は、鎮魂を表し、黒い光は深い悲しみの涙であり、暗黒の世界(戦争)を再び繰り返すまいとの決意である。全体をやわらかい紫で表現したのは死者への悲しみと鎮魂をこめた。(昭和55年6月5日寄贈)

西村計雄 ■東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年~47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

第39回

沖縄研究奨励賞贈呈式 受賞記念講演要旨

沖縄協会は、平成30年1月25日「第39回沖縄研究奨励賞贈呈式」を開催した。今回受賞した自然科学部門のトーマクラウディア、人文科学部門の下地理則九州大学大学院人文科学研究所細菌学講座准教授、人文科学部門の下地理則九州大学大学院人文科学研究所准教授、社会科学部門の坂下雅一、一橋大学大学院社会学研究科特別研究員による受賞記念講演の要旨を紹介する。



受賞者紹介(左より) トーマクラウディア氏、下地理則氏、坂下雅一氏

沖縄で多発する細菌感染症 レプトスピラ症に関する研究

琉球大学大学院医学研究科細菌学講座 准教授

トーマクラウディア

レプトスピラ症は、熱帯・亜熱帯地域を中心に広く分布する細菌感染症であります。病原性レプトスピラは、多くの哺乳動物に感染し、腎臓に定着し尿中へと排出されます。ヒトはこの尿、あるいは尿に汚染された水や土壌との接触により感染します。レプトスピラ症の軽症型の場合は風邪と似た症状で回復するが、重症型の場合は、黄疸、肝臓・腎臓障害などの症状も示します。レプトスピラ症の抗菌薬による早期治療は効果的ですが、腎臓に定着した菌に対しては抗菌薬が無効であります。また、腎臓に定着した菌は宿主の防御システムによっても排除されないため、この感染機

構を理解することはレプトスピラ症の重症化と感染サイクルを遮断するため重要であります。

そこで、私はレプトスピラの宿主防御システムの回避メカニズムと腎臓への定着機構の研究に取り組んできました。これまでに得られた成果は、病原性レプトスピラはマクロファージに貪食後、ファゴソーム内で生存できることを明らかにしたことです。そして、全身に広がったレプトスピラは感染約一週間後に、腎臓の受容体へ結合し、近位尿管内で増殖・菌同士の結合が促進され、膜小胞を含むバイオフィーム構造が形成されるといふことです。また、高病原性と弱病原性株の比較解析によつて、宿主細胞外マトリックスタンパク質への結合に関与している細菌因子を同定しました。

一方、レプトスピラ患者は、日本国内では年間50人程度報告されていますが、沖縄県は全国の過半数を示しています。主に河川でのレジャー等で感染するとされ、本県の生命線である観光産業へ大きく影響するものとして、その対策は重要な課題となっております。2016年には、沖縄県の患者数の報告が年間で最多となり、私は臨床現場で望まれている迅速診断法の開発も開始しまし

た。今後は、企業と連携しながら検出感度および特異性を改善しつつ臨床研究も開始する予定です。

琉球諸語研究が 目指す未来

九州大学大学院人文科学研究所 准教授

下地理則

沖縄と鹿児島奄美諸島で話される言葉は、長く琉球方言と言われてきたが、最近では琉球諸語と呼ばれる方が普通になってきた。琉球「諸語」とは、つまり、日本語と異なる言語、しかも複数の言語からなる言語集団という意味である。それほど、琉球列島の言葉は多様に富んでいる。

しかし、琉球諸語は今、消滅の危機に瀕している。流暢な話し手は高齢化の一途をたどり、若い世代に継承されていない。典型的な危機言語の様相を呈している。おそらく、あと30年もすれば、どの島に行っても、標準語に地域色が少し色づいた程度の、似たような言語だけになつてしまふであろう。私を含め、琉球諸語を研究する人たちは、今、この言語の消滅の危機に向き合いながら、なるべ

く多くの琉球諸語を記録に残すことを目指している。

普通、危機言語を考えるとき、研究者たちの悲壮感と焦燥感が強調され、「暗い話」になってしまいがちである。しかし、私は、琉球諸語研究の未来の明るい部分に注目している。琉球諸語研究は今、日本の方言研究の最先端を走っていると云われたら、驚く人々も多いのではないだろうか？日本の方言も、琉球諸語と同様、消滅の危機に瀕しているが、全国の方言研究者たちが琉球諸語研究の取り組みを参考にしている。琉球諸語研究者は、全国の方言研究でも珍しく、若い研究者が常に参入してきており、さらに国外の研究者も交え、活発に交流している。琉球諸語研究が活発で、全国の方言研究のトップを走っている理由は、標準語を中心として発展してきた日本語研究の「呪縛」を振り払い、琉球諸語を世界の言語と対等に見て、対等に議論する気風があるからである。小さな島の、話者数わずか数十から数百の言葉が、実は世界でも珍しい特徴を持っている、ということもある。危機に瀕した琉球諸語を記録に残す、という「守り」の姿勢だけでなく、琉球諸語研究の膨大な研究成果を世界に発信し、欧米中心の言語研究を根底から覆す「攻め」の姿勢を、琉球諸語研究者たちは持っている。

政治文化としての「沖縄県民」

一橋大学大学院社会学研究科 特別研究員

坂下 雅一

受賞事由となった拙著『沖縄県民の起源』は、「沖縄県民」を切り口に、現代沖縄人の政治意識を底流で規定する政治理念、およびその主体としてイメージされる「我々」観念（政治アイデンティティ）の特性と成り立ちを社会的に探究した作品です。

「沖縄県民は「県」の語を含むがゆえに沖縄が日本国家の一部であることを前提とした用語で、1972年の「復帰」以前より復帰運動の中で好んで使われていました。

しかし「復帰」後は、日本国家への帰属を所与の前提とする「復帰思想」に批判的な思潮が興隆し、多くの共感者を得るに至りました。一般に政治理念は、それに対する共感が「社会」で広まる事で浸透してゆくものと観念されていますが、それならば「復帰思想」に批判的な思潮への共感の広がりとは、それと相いれない「沖縄県民」の影響力を弱めるはずですが、

しかし実際には、例えば新聞の文化欄で復帰思想批判がどれだけ盛り上がるうとも、政治欄の主語は「県民」と相場が決まっています。なぜでしょう？この問いに「政治文化」という概念を入れて、考えるのが私の研究アプローチです。

政治文化とは選挙や運動、新聞の政

治欄といった政治的な「場」での語りや暗黙裡に統制する規範や文化コード（ふるまい方、表現の仕方）です。この政治文化の観点から見れば、新聞の政治記事の執筆者や政治家は、仮に思想的に「復帰思想」に批判的であっても、記事や演説で「沖縄県民」をまったく使わない事は困難です。なぜならこうした「場」は、「主語は「県民」があたりまえ」と人々に感じさせる政治文化コードに暗黙裡に統制されているからです。

このように「政治文化」の概念を入れると、もはや常套句化して陳腐さすら感じる「沖縄県民」という「我々」観念は、まさに常套句化しているがゆえに現代沖縄人の政治意識の特性に迫る核的な概念に転じます。

そしてこの政治文化としての「沖縄県民」の成り立ちを探究する事で、戦後沖縄の政治意識・理念・アイデンティティが形成される歴史過程が、新しい視点から浮かび上がるのです。

沖縄平和祈念堂美術館

沖縄平和祈念堂美術館は、美をとおして平和を訴える「美と平和の殿堂」を指向する沖縄平和祈念堂の附属施設として昭和56年に堂敷地内に建設した。当時、県内初めての美術館のオープンであり、これまで、平和祈念堂とともに沖縄の芸術文化の向上に寄与している。

平成20年には美術館を堂内前室ホール内に移設し、美術展示室及び収蔵庫を良好な環境のもと、沖縄平和祈念堂と寄贈絵画を一体管理している。収蔵絵画は平和祈念堂の理念に賛同された日本洋画壇や世界洋画壇で活躍する画家、沖縄出身画家（物故画家含む）から寄贈された大作絵画で、美術館展示テーマをもとに1年を2期（年末年始と慰霊の日を境界とする）に分けて、前室ホール壁面と美術展示室において展示している。また、平和祈念堂の理念の普及と多くの人々に所蔵絵画の鑑賞の機会をつくるため、県内外の美術館や各自治体並びに公共施設の企画展等に絵画の貸出を行っている。所蔵絵画は103点。



● 美術館展示テーマ「宇宙即私の希求」

沖縄平和祈念堂制作の理念「宇宙即我・世界平和の希求は、沖縄がその中心となる。」山田真山先生のこの理念に呼応して、絵画作品が寄贈され美術館が設立された。美術の求めるものは常に平和の世界である。「宇宙即我」は、すべての美術が内包しているテーマであり、この美術館の永遠のテーマである。

公益財団法人沖縄協会 元美術顧問 安次富 長昭

沖縄協会理事会・評議員会について

平成30年3月7日、当協会は平成29年度第2回理事会・評議員会を沖縄県糸満市にある沖縄平和祈念堂管理事務所で開催した。議案は平成30年度事業計画及び収支予算等で、野村一成会長他理事・評議員によって綿密に審議され承認を得た。



清ら蝶園

当協会では、戦後60年事業として平成17年11月6日に、国内最大の蝶・オオゴマダ



ラを飼育する「清ら蝶園」を同じ敷地内に建設した。神秘的な黄金色の蛹から羽化するこの蝶は羽を広げると13センチメートルに達する。ギリシャ語で蝶のことをプリシケ(魂)の意といい、この蝶園で平和の「魂」として育て、戦没者を追悼し世界平和の実現を祈る平和祈念像の使者として訪問者を優しく迎え、無言のうちに命の尊さと平和の大切さを訴えている。また、開園以来、慰霊の日に摩文仁の空へ放蝶を実施しており、放蝶とおして平和祈念堂をはじめ平和祈念公園を平和の魂が舞い飛ぶ美しい環境づくりを目指している。

沖縄平和祈念像に奉納された折り鶴とメッセージパネル

毎年沖縄平和祈念堂には県内外から修学旅行団や各

種団体が訪れ、平和学習や慰霊式典が行われている。そのなかで、参加者一人一人が心を込めて折り上げ、一つに繋げてまとめた折り鶴の束や数多くの折り鶴を貼り付けて作製した平和へのメッセージパネルが平和祈念像に奉納されている。その折り鶴は多様な色紙や千代紙が使われ、まとめる配色に形も様々。奉納後しばらくして、折り鶴の一部は地元糸満市内の多機能型事業所に提供され、再生紙の資材として活用されている。



沖縄平和祈念堂改修工事に関するご寄付について

開堂から40周年を迎える沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今

後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様にご経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

※詳細は「公益財団法人沖縄協会のホームページ」に掲載予定

応募案内

沖縄青少年勉学支援制度について

この制度は、本土(沖縄県)以外の都道府県で働きながら学ぶ沖縄出身青少年を支援し奨励するため、昭和48年に設置された。この制度に賛同いただいた沖縄出身者を含め多くの方々からの温かい寄附金でつくられた「働きながら学ぶ沖縄青少年支援基金」の運用により勉学支援金を給付し、これまで延べ1119名の働きながら学ぶ青少年が支援を受け、習得した資格や技術を活かしてそれぞれの進路を歩んでいる。平成30年度の応募は、4月1日〜6月30日まで。当日消印有効。

※詳細は「公益財団法人沖縄協会のホームページ」



沖縄平和祈念堂来堂者の感想録

沖縄平和祈念堂には年間数多くの人々が訪れており、美と平和が織りなす空間で、心に感じた想いを記した感想録がある。その一部を紹介する。(平成30年2月現在・65,584人)

戦争を二度と起こさない。その思いは誰でも共有できるはず。なのに、どこかでそれがすり抜けていってしまう。そんな予感がする。でも悪い予感には当たって欲しくない。そして、戦争するのをやむなし、と誰にも言わせないにはどうするか。私には分からない。だけど、少なくともここに展示してある作品を見たら、どれも平和を愛していた、そんな気がする。しかもその愛はかなり巨大だ、と思う。だからこんなにも力強いものばかりなのだろう。勿論、芸術てのものに抑止力などというものはないかもしれないが、少しでも平和を愛する、例えそれがどんなに当

人にとっては欺瞞に満ちているように思えていたとしても、平和からしか新たな平和は生み出せないのだと。戦争は、新たな火種をまた作るだけなのだ。平和な今だからこそせめて作家が訴えて、命がけの作品から聞こえる声で、私は、そして皆が平和のための平和作りを、平和のみを愛することを約束し、常に実行して欲しいし、私もしたい。平和学習を飽きたってという人もいるけれど、そんなに平和は簡単じゃないし、短絡なものでもない。平和への希みは、こんなにも多様だと、この建物に来て見て欲しい。これが、私の思いです。平成27年9月・男性